

東京大学『古典講習科』の人々

町田, 三郎

<https://doi.org/10.15017/2328493>

出版情報：哲學年報. 51, pp.59-78, 1992-03-30. 九州大学文学部
バージョン：
権利関係：

東京大学『古典講習科』の人々

町田三郎

(一)

西村天囚の『碩園先生文集』卷三に「古典科師友壽識記」なる一文がある。大正四年のことで、天囚の師である加藤弘之の八十の寿を祝い、かつ同学名取士毅の古稀を併せ祝おうと、「古典講習科」の同窓三十余人が、卒業以来三十年ぶりに一同に会したその折の文章である。全て漢文でおよそこうである。

維新以降、長を取り短を補うの説起り、教学兵刑より以て技芸の末に至るまで、一切西法を崇尚す。是れ固より可なり。然うして推波助瀾、往きて反らず。明治十五六年の交に訾り、海内靡然として洋風を模倣し、舊俗を抵排し、国典漢書、なお且に棄てて講ぜず、將に彼の短を併取して、又我の長を舍つ。その弊言うに勝えざるものあり。今樞密顧問官男爵加藤(弘之)博士、時に東京大学総理たり。深く此を慨み、朝に奏して、古典科を大学に特設す。四年一期、諸生を募りて以て国典漢籍を講習せしむ。前後兩期、入学する者一百余人。四方向往し、舊学復興して氣運も亦た一変に随う……。

当時これが教授たる者、小中村(正矩) 木村(正辞) 本居(豊穎) 黒川(眞頼) 栗田(寛) 小杉(楹邨) 諸先生の国典に於ける、中村(正直) 重野(成齋) 川田(甕江) 三島(中洲) 島田(篁村) 南摩(綱紀) 内藤(耻叟) 諸先

生の漢籍に於けるが如き、並びに碩学鴻儒一代の耆宿たり。科廢するの後、相い踵いで道山に帰し、その今なお存する者は二先生あるのみ……。抑も当時諸老先生の彬彬として此くの如きありと雖も、倘し古典科の設けなければ、則ち前を継ぎ後を啓くもの、恐らくはその人に乏しからん。而るに幸にして博士の群議を排して、斯の科を特設し、以て読書の種子を養い、古典舊学をして地に墮ちざらしむるを得しは、その功撥乱反正と相似たり。宜なり、崇報加隆、入りて樞府の班に入りしは。

大正四年乙卯、博士年八十。同学の京に在る者、讎を上野常盤花壇に張りて、以て博士の寿を為す。名取士毅、同学中に在りて齒最も長ぜり。入学の時、年已に不惑。教職を棄去し、妻子を親家に托し、年少の諸生と伍して、矻矻として業を肆む。好学篤志なる者に非ざれば能くせざるなり。今亦齡古稀に躋る。乃ち兼ねて士毅の寿を為す。会する者共に三十餘人。長尾子生京都よりし、時彦浪華より亦た来り与る。その余の同学、或いは早世、或いは京外にありて会賀するを得ざるもの尠なからず。甫めて坐定り、萩野礼卿、衆に代わりて賀詞を陳べ、衆皆觴を称げ寿を献ず。博士と士毅と忻然として酬す。情意懽洽として一家の親の如きなり。

時彦困りて在学交游の樂しみを回想するに、歴々として昨の如きも、荏苒として已に三十年なり。少き者も亦た將に頽白ならんとし、長者は則ち鬚髮皤皤として、風度譊然、老成の典型を見し、人意を強くするに足るも、死生聚散の感も亦た中に動くなきこと能わず。嗚呼、我輩の士毅を寿する所以は、即ち自ら寿する所以なるも、博士を寿する所以に至りては、則ちその関する所亦た大なり。惟うに方今學術大いに開け、宜しく復た外に待つなかるべきに、而も今なお我を棄てて彼に向かうは何ぞや。夫れ権あり然る後輕重を知り、度あり然る後長短を知る。古典舊学なる者は、政教の権度ここに存す。是れを以て古典講ぜざれば則ち権度正しからず、権度正しからざれば則ち何を以て輕重長短を辨せんや。

今博士齒望竝びに高く、学識兼ねて優れ、慮を殫くし誠を竭くして以て今上の顧問に備う。而して今上聖明、含粹

稽古、政教の権度を正して彼我の輕重長短を辨ずる所以の者は、博士必ず献替する所あらん。則ち博士の寿は、天下の爲に賀するに足りて、独り我輩頌禱の私のみならざるなり。衆多爲めに歌詩す。時彦乃ち退きてこれが記を作る。

これより先き明治三十五年、重野成齋は、「古典科諸子との会飲」と題する七絶を詠じている。⁽²⁾

不用蹉跎歎白髮

只須潦倒醉青春

年々此會人偕健

相遇相逢好飲醇

(二)

幕末に活躍した漢学の大家たちも明治の新政を迎え、しだいに年を遂って凋謝していった。明治六年 門田撲齋、七年 塩谷黃山、三上是菴、九年 安井息軒、関藤藤陰、十年 山田方谷、十一年 林鶴梁、春日潜庵、大槻盤溪、芳野金陵、池田草庵。

むろんかれらの弟子や生き残りの漢学者もなお多かった。中村敬宇、重野成齋、川田甕江、島田篁村、三島中洲、東沢瀉、木下犀潭等々であるが、こうした顔ぶれを見ても、安井息軒を代表とした幕末漢学の隆盛期は終わつたとの感否めない。そのうえ時流は、和漢の旧学を拒否して、万事が西欧をよしとした。中村正直も明治初年をこう述懐する。「此時二当リテハ漢学ハ土直ノ如クニ棄ラレ、或漢学者ハ鬱憤ニ堪エズ不平ノ余リ海ニ入りテ死スルニ至レリ」⁽³⁾「吾カ訳スル西国立志編十部ハカリヲ以テ、佩文韻府ノ古渡リノ最上ノ本ト交換シ書肆ハ欣然トシテ喜色アリ。佛書ニ至リテハ更ニ甚シ……」

明治十年、東京大学は創設された。その文学部の第二科として和漢文学科が設置された。当時の法理文の三学部綜理の加藤弘之は文部省に提出した「伺書」に、設置理由をこう述べている。

今、文学部中、特ニ和漢文ノ一科ヲ加フル所以ハ、目今ノ勢、斯文幾ンド寥々晨星ノ如ク、今之ヲ大学ノ科目中ニ置カザレバ、到底永久維持スベカラザルノミナラズ、自ラ日本学士ト称スル者ノ唯ダ英文ニノミ通ジテ国文ニ芒乎タルアラバ、眞ニ文運ノ精美ヲ収ムカラザレバナリ。但シ和漢文ノミニテハ固陋ニ失スルヲ免レザルノ憂アレバ、并ニ英文・哲学・西洋歴史ヲ兼学セシメ、以テ有用ノ人材ヲ育セント欲ス。

要するに和漢学を大学の一科に組みこむことによつて衰退の一途を辿る日本の伝統的な学問を保護し維持しようと思つたわけである。しかし当時の意見として、和漢学はとかく偏狭に失する惧れがあるからとして、相当の時間英文学が必要学課として課せられ、他にフランス語・ドイツ語の兼修が命ぜられた。従つてその習得すべき学課目の範囲が広すぎて、純然たる和漢学の専門とは言い切れないというのが実状であつた。ましてこの頃東京大学での講義は、すべて英語であつた。日本語による教授は、明治十六年四月からのことである。

そこで史学や政治学等の研究に必要な和漢の古典、歴史・文学等の基礎知識をしっかりと修得し、しかも漢学の老大家の凋謝したのちを承けつぐべき後継者養成の必要性から、これを民間のみに任せてはおれず、大学内に「古典講習科」を設置して新進の徒の教育に当たらねばならぬとする意見が抬頭してきた。

はやく明治十二年十二月、綜理加藤弘之はこの設置を文部省に建議したが認められず、ついで十四年十二月再びこれを建議した。このときは文部省も提案に賛成し、翌十五年五月、文学部付属として「国学」を内容とする「古典講習科」が新設された。ついで同年の十一月、文部省専門局長浜尾新から、特に漢文学講習科の設立の要が説かれ、そこで以前に設立された「古典講習科」を甲部とし、新たに「漢文学」を内容とする「支那古典講習科」を乙部として設立運営することとなった。これが「大学古典科前期」と称されるものである。

乙部の場合、修業年限は四年、生徒は官費生十五名、私費生二十五名、計四十名を定員とし、十六年九月、第一回の募集開始。四十名の定員に対して応募者は百六十名であった。四倍の競争率であった。そして翌十七年、甲乙部は「国書課」「漢書課」と改称される。これを「大学古典科後期」と呼ぶ。

明治十六年四月十六日、中村正直は「古典講習科乙部開業式」に参列して、こう述べる。

夫レ方今洋学ヲ以テ名家ト称セラルル者ヲ覩ルニ元來漢学ノ質地アリテ洋学ヲ活用スルニ非ルモノナシ。漢学ノ素ナキモノハ或ハ七八年或ハ十餘年西洋ニ留学シ帰国スル後ト雖モ頭角ノ嶄然タルヲ露サス。ソノ運用ノ力乏シク殊ニ翻訳ニ至リテハ決シテ手下ス能ハサルナリ。然レハ則チ今日朝野ノ間ニ在テ卓然トシテ衆ニ踴ハレ有用ノ人物ト推サルルモノ漢学者ニ非サルハ無シト断言スルモ可ナリ。唯漢学ヲ裡ニシテ洋学ヲ表ニスル者アルノミ……。夫如此ナルトキハ漢学書生何ソ明治ノ維新ニ背カンヤ、独り明治ノ維新ニ負カサルノミナラス明治ノ維新ニ勲勞アリト云ハサラント欲ストモ其レ豈得ヘケンヤ。

以下応神天皇の世に濫觴せる漢学周孔の学の変遷をみ、それが常に人材を造成し政事を裨補し綱常倫理を保持してきたと説くが、今や「人或ハ之ヲ察セス漢学ヲ以テ迂濶ナリト為ルモノアリ」と歎じ、「今日ノ情態ニテソノ成り行キニ任セテ数十年ヲ経過セハ専門ノ漢学者ハ跡ヲ絶サルヲ保シ難シ」ともいう。こうした状況の中で、

今東京大学ニ於テ古典講習科乙部ヲ設クルハ数十年ノ後ニ至リ鴻儒碩匠トナル種子ヲ下スモノナリ。後ノ今ヲ視ルハナホ今ノ昔ヲ視ルガゴトシ。舜何人ゾヤ我何人ゾヤ。諸子他日ニ至リ徂徠・白石ヲシテ美ヲ前時ニ擅ニセシメサルハ吾ノ信スル所ナリ。⁵⁾

漢学の専門学徒がやがてこの中から輩出するであろうと期待して演説をしめくくる。そして事実、中村の期待は裏切られることはなかった。

乙部の規定は次の如くである。

古典講習科乙部規則

第一条 古典講習科乙部ノ課程ヲ四周年トシ之ヲ八期ニ区分ス

第二条 該部中、經學、諸子、法制、詩文、卒業論文ノ六課目ヲ立テ之ヲ兼修セシム

第三条 八期ニ於テ講習スル課目即左ノ如シ

第一期 經學 諸子 史學 詩文

第二期 〃 〃 〃 〃

第三期 〃 〃 法制 〃

第四期 〃 〃 諸子 〃

第五期 〃 〃 詩文

第六期 〃 〃 〃

第七期 〃 〃 諸子 法制 漢文

第八期 〃 〃 〃 〃 卒業論文

第四条 該部ニ入ルヘキ者ハ二十年以上三十年以下トス^⑥

第五条 該部ニ入ルヘキ者ハ天然痘又ハ種痘ヲ了ヘ身体壯健ニシテ且ツ左ノ課目ノ試業ニ合格スル者ニ限ル、但官

費生十五名自費生二十五名ヲ限リ入学ヲ許ス^⑦

一 經書 辭書 書經

一 歷史答辨^{左伝} 史記

一 席上作文^{三百字以上} 五百字以下

其他ノ諸規則ハ都テ古典講習科甲部ニ同シ

教授陣は、東京大学教授の中村正直（漢文学・支那哲学）、三島毅（漢文学）、島田重礼（漢文学・支那哲学）、助教に井上哲次郎（史学及び東洋哲学史）が配され、他に秋月章軒・南摩羽峯・信夫恕軒・内藤耻叟らも出講した。履修課目は經史子集のいわゆる四部と法制とを主とするが、授業は教授のがわからず漢籍講読と輪読、いわゆるゼミナールがあり、漢作文は毎月一篇が課されていた。

当時実際にどのような講義が行われていたのかは不明であるが、その一端を島田重礼の最晩年に教えをうけた宇野哲人は、「島田先生は清朝の学問ばかりでした」「いまでもおぼえておりますが、『死生契濶、子と説を成さむ』という契濶は『毛伝』に勸苦なりとある。勸苦というけれども、これは何という本にはこうある、あれにはこうあると、いろいろな本を引いてお話になる。先生何の本をもっておられるかわからない。仕方がないから、あとで図書館に入つて『皇清經解』を出して探してみる。ははあ、ここにあったというわけで……先生は、これを読めばいいということはおっしゃらないんです。島田先生は、そういうお方でした」といふ⁽⁸⁾。そして「毛詩」はもっぱら『皇清經解統編』所収の清の胡承珙撰、陳奐補の『毛詩後箋』三十巻によつたという。いわば『皇清經解』という中国の最新の研究叢書をたよりにして実証的に研究を進め、学生を指導しようと試みているわけである。この姿勢は、従来の漢学といえは「左国史漢」と漢詩、あるいは道德修養論で終始したものとは異質の「近代的な学問、教育」を旨とするものといつてよい。史学の重野安禪の「学問は考証学」とする立場も、これに近い。

元來この文学部附設の「古典講習科」の運営費は、大学の通常経費の外に請求したものであったが、これが認められず学内経費で支弁することとなり、当初から経済的に維持の難しい状況にあった。世間一般も「洋学」尊重の気風に傾いてい、世論の理解をうることも困難であった。こうした状況の中で、大学当局は、十八年に至り講習科生徒の募集を停止した。しかも二十年には修業年限を一年短縮することとなり、二十一年には遂に全廢に至つた。結局「古典講習科」は二十年と二十一年の二回卒業生を送り出すに止まつた。前期二十年の卒業生二十八名、翌二十一年の後

期卒業生は十六名。学士の称号は与えられなかった。

卒業生は左の通り。

前期 市村環次郎 林泰輔 松平良郎^(補注) 岡田正之 花輪時之輔 熊田鉄次郎 今井恒郎 名取弘三 須藤求馬 瀧川龜太郎 末永允 安原富次 宮川熊三郎 堀捨次郎 安本健吉 深井鑑一郎 福島操 池上幸次郎 渡辺恕之允 橋本好藏 萱間保藏 日置政太郎 福田重政 鈴木栄次郎 松本胤泰 與野山熊男(二十八名)

後期 竹添治三郎 島田鈞一 山田準 児島猷吉郎 長尾慎太郎 黒木安雄 平井頼吉 竹中信以 北原文治 藤沢碩一郎 齋藤坦藏 菅沼貞風 大作延寿 桜井成明 関藤十郎 牧瀬三弥(十三名)

氏名の脇に○印を附してある者はその後の消息の知られる者である。また中途退学者が多数いたが、その中に西村天囚、萩野由之らが、隣接する甲部国書課出身に落合直文、小中村義象、安井小太郎らがいる。

(三)

明治十九年、天皇は東京大学を視察した。その折りの感懐を侍講元田永孚に告げ、元田はこれを「聖諭記」としてまとめた。その一節にこうある。

朕過日大学ニ臨ス、設クル所ノ学科ヲ巡視スルニ、理科、化科、植物科、医科、法科等ハ盛々其進歩ヲ見ル可シト雖モ、主本トスル所ノ修身ノ学科ニ於テハ、曾テ見ル所ナシ、和漢ノ学科ハ修身ヲ専ラトシ、古典講習科アリト聞クト雖トモ、如何ナル所ニ設ケアルヤ過日觀ルコトナシ、抑大学ハ日本教育高等ノ学校ニシテ高等ノ人材ヲ成就スヘキ所ナリ、然ルニ今ノ学科ニシテ政治治要ノ道ヲ講習シ得ヘキ人材ヲ求メント欲スルモ、決シテ得ヘカラス、假

令理科、医科等ノ卒業ニテ、其人物ヲ成シタルトモ、入テ相トナルヘキ者ニ非ス、当世復古ノ功臣内閣ニ入テ政ヲ執ルト雖トモ、永久ヲ保スヘカラス、之ニ繼クノ相材ヲ育成セサル可ラス、然ルニ今大学ノ教科、和漢修身ノ科有ルヤ無キヤモ知ラス、国学漢儒固陋ナル者アリト雖トモ、其固陋ナルハ其人の過チナリ、其道ノ本体ニ於テハ固ヨリ皇張セサル可ラス……。

右の「聖諭記」がいうように、学問の主本が修身にあつて、和漢の学がこれを担い、その出身者こそが政治治要の道の実践者、いわゆる相材にふさわしいか否かには問題があるが、当時東大内において「古典講習科」アリト聞クト雖トモ如何ナル所ニ設ケアルヤ過日觀ルコト無シ」との指摘は、「古典講習科」の学内位置を如実に示している。学内では無視され、経費の面からも厄介物扱いであつたのである。明治二十年前後の森有礼を文部大臣とする時代こそ最も欧化模倣の強烈をきわめた時期であつたことを思うとき、社会一般の中での漢学の衰微は覆うべくもなく、この頃には十年代初中期の和漢学見直しの熱気もすっかり冷えこんでいた。大学内においてその存在さえ知られない「古典講習科」とは、まことに時代風潮の正直な反映であつた。「古典講習科」は大学における日陰の花であつた。

しかしこの「古典講習科」から、たしかに「聖諭記」が期待する「治要ノ道」を体して政界を動かす人物こそ出現しなかつたが、実は明治の後半から昭和の初年にかけて、日本の東洋学を代表する俊才たちが輩出することとなつた。天囚のいう「前を継ぎ後を啓く」ものたちである。たとえば東洋史学の市村瓊次郎、甲骨文研究の林泰輔、『史記会注考證』で知られる瀧川亀太郎、日本漢学史の岡田正之、中国文学史の児島献吉郎、芸術史の長尾慎太郎らが、中退の西村天囚に『日本宋学史』があり、国書課の安井小太郎もつばら漢学界で活躍する。異彩を放つ人物に若くして『大日本商業史』の名著を残し、フィリップに客死する菅沼貞風がいた。わずかに二回、四十数名の卒業生を送り出したに過ぎず、しかも大学内の日陰者的存在であつた「古典講習科」は、思えばまことに効率よく逸材を育てあげていたのである。

さて、「古典講習科」入学前後の事情を説いて精しいのは、前期卒業生の一人である瀧川亀太郎の「碩園博士の初年と晩年」〔懷徳〕第〔2号所収〕である。

明治十五年春、余始めて東遊し篁村先生の雙桂精舎に入る。重野先生の塾生なりとて講席に列せし一書生あり、身の長け五尺八九寸時々塾舎に來り好みて文章を談ず。その言娓娓聽くべし。一日同舎生郷里より碑文の起草を頼まれたれども、先生に願ふも畏多ければ誰人か筆を執るものぞといふ。彼の身長の一書生我作らんと数日ならずして作り來る。布置齊整文字簡練、自ら大家の規模あり。余一読驚異その郷里と姓名を問ふに、種子島の産西村時彦と答ふ。これ余が碩園居士と識りし初めなり。

翌十六年東京大学文学部に新に古典講習科を設け、生員を募りて和漢の学を講習せしむ。碩園も余も幸に選抜試験を通過し官費生として入校することを得たり。碩園才力群を抜きことにその文章は漸く老熟に近く、教授諸先生も射鵰の才として深く望みを屬せられたり。当時大学文学部は神田一橋外に在り、官費生は校中に寄寓すべき規定なりし故、碩園と余とは案を朕ね堂を同じくし、相互の交誼逾加はりしが、その後大学の校舎今の本郷赤門内に移るに及び、諸生も自由に下宿することを許され、碩園は森川町に余は駒込蓬來町に転寓したり……。

十九年、政府庶政の改革より、古典科生の官費は廃止せられ、碩園は学資を得るに由なく、余と別れて再びもとの駿河台袋町なる成齋先生の家に寄宿することとなりしが、その後又日本橋濱町のホテル屋に転寓せり。当時原田博文堂の出版にて世間をわかしたる『屑屋の籠』は此の際の著作なり……。

瀧川の記述はなお続くのであるが、要するに天囚の場合、十五才で郷里種子島をあとにして、亡父の親友であった重野成齋を頼つて上京する。重野は天囚の人と才を愛し、自分の邸内に住ませ子供同様に遇し、しかも当時都下で有名であった篁村の雙桂精舎に通わせて經学を学ばせた。ここで瀧川とも逢うのである。こうした折り「古典講習科」の新設を知り、しかも給費の制度のあることを知って、勇躍としてこれにとびついたわけである。天囚にとつて試験

科目中の漢作文など得意のものであったろう。入学後、天囚は師の成齋の家や寮にいた間は、監督の目もあつてまじめに努めたのであろうが、寮から解放され自由な下宿住いとなり、給費生として収入も安定し身分も一定したとなると、遊び心が頭をもたげてきた。やがて成齋にも日ごろの不行跡がばれ、以後破門の扱いとなる。やがて追い討ちをかけるように給費制度も打ち切れ、下宿からは焼け出され、借金取りには責めたてられ、四方八方どん詰りの状態で書き上げたのが、天囚の名を一時に轟かせた『屑屋の籠』の一作であつた。

一方『大日本商業史』を「古典講習科」の卒業論文として書きあげた菅原貞風ただかぜの場合はどうであつたらうか。貞風は十五才の時、楠本端山に師事し、端山が平戸の旧藩主松浦伯の公子二人の教育をまかされたとき、その学友に選拔される。明治十三年、新たに平戸に猶興書院が成り、入学する。その翌十四年、十七才で長崎県北松浦郡雇出仕となる。この時平戸貿易の変革を調査しこれを編纂する。この努力が認められて松浦伯から文学修業として東京遊学を命ぜられる。十七年一月のことであつた。そしてこの秋九月、「古典講習科」後期に入学、二十一年第二回の卒業。それが政府の給費生であつたかどうかは不明。『大日本商業史』の冒頭に、卒業記念写真が掲げられてい、前列に岡松壘谷を中心にした教授陣、中上段に十三名の卒業生が並んでいる。欠席は児島猷吉郎、山田準、牧瀬三弥の三名であつた。福本日南の『菅原貞風君伝』⁽⁹⁾によると、

君の猶興書院に在るや、砥礪衆に越え、才学群を抜き、嶄然として夙に頭角を顕はせり。書院元と諸生拔擢の法あり、松浦伯君が奇才を喜び、明治十七年命じて東京に遊学して其器を大成せしむ……此年九月帝国大学に入りて古典科に就く。爾来中村敬宇、島田篁村、秋月韋軒、三島中洲の諸老に従ひて学び益々造詣する所あり、又其傍ら時々専修学校に至りて経済の学を講ず、而して修史の志たる未だ嘗て一日も懷を離れず。大学に文庫あり。古今の書数万卷を蔵し校徒の閲覽に便す。君則ち日に庫中に入りて古書を読む。三月忘肉味の思あり。同学皆笑ひて曰く、貞風の正科は登文庫、餘科は則ち臨講筵と。而して人多くは其志を知る者あらず。

弱年から楠本端山に学才を見こまれていた貞風にとつて「古典講習科」の正則の講義に当然ついていけたであろうが、かれの本来の志は、ひとまずは商業史の完成にあつた。だからせつせと図書館通いをしていたのである。卒業後貞風は、いったん商業学校に職をえ、「日本商業史」の加筆訂正に従事するが、これも一段落すると、こんどは南海の諸島の事情を探究し、かつ貿易植民の事業に与かろうとする夢が日ごとにくらみ止まることがなかつた。この時講習科の同学斎藤坦藏が、自らは病弱で同行できぬからと数百金の資金を投じ、貞風のマニラ行きを援助した。マニラに到着後、わずかに五ヶ月、貞風はこの地で客死する。二十五才の若さであつた。

(四)

市村瓚次郎は、小永井小舟門下から岡田正之らとともに「古典講習科」前期生となるが、一学年下のいわゆる後期生の大作延寿、号鎮卿別号蘭城の遺稿の序に次のように書いている。

余、大学に遊び、友三人を得たり。曰く、埼玉の大作鎮卿、曰く、平戸の菅沼伯狂、曰く、富山の日置子均なり。子均は眉目清秀、才華煥発にして、筆を執れば千言立ちどころに成る。伯狂は人と為り沈摯寡黙にして、事を行うに勇なり。常に一世を不可とするの概を有す。鎮卿は口呐々として言う能わざるが若し、而るには確然として守るところ有り。最も詩古文辞に通ず。此の三人なる者は、性行學術各々同じからずと雖も、皆卓犖たる奇傑の士なり。余その規益を受くること多し。既にして皆大学を去る。伯狂は事功に奮わんと欲し、慨然として海を渡り、南のかた呂宋に入るも、瘴癘の冒すところとなりて死す。鎮卿は豊後に宦遊し、未だ幾くならずして職を辞して帰る。環堵蕭然、戸を閉じて書を読み、将に大いに発するところ有らんとす。而るに熱を病み以て歿す。子均も亦舌瘻を患う。時に余將に禹域に遊ばんとし、訪いて別を叙す。其の形容憔悴するをみ、悽然として泣下る。数月の後、余歸りて再び訪えば、則ち已に亡し。子均の歿年二十八、鎮卿の死、子均より少きこと一歳、伯狂は三歳なり。嗚呼、

天果して才有るを忌む乎、何為れぞ我が三人なる者をして此に至らしむるや……。(10)

菅沼伯狂はいうまでもなくマニラで客死した菅沼貞風のこと。菅沼の『大日本商業史』は人あつて上梓の運びとなつたが、大作鎮卿の作る所の「詩古文辞数百篇」は刊行をみない。そこで有志と相謀つて遺稿を二巻として刊行することとした。なお日置子均にも「策論小説」が存するが、これは後日を期したい、というのが市村の右の序のおおよそである。市村の年譜⁽¹¹⁾によれば、「明治二十五年、二十九才の七月、学習院教授となり、同月史蹟調査のため中国へ出張、帰路北京にて臥病月余、十一月帰国」とある。日置子均の死亡もこの年にあつた。「古典講習科」卒業後、わずかに四年である。

なお市村は元治元年、茨城の筑波に生まれる。代々の地主であつた。はじめ明治法律学校に学ぶがまもなく「古典講習科」に転じ、卒論は「支那史学一斑」であつた。学習院・東大の教授を歴任し、また早稲田での教授歴も長い。『東洋史統』『支那史要』等の著作がある。昭和二十二年歿。八十四歳。⁽¹²⁾

黒木安雄、号欽堂については、「懷徳」の「天囚追悼号」に滝川亀太郎が「碩園博士の初年と晩年」の文章の冒頭の部分で「桜泉小牧先生斃去せられし時…、事は一昨年秋に在り、程なく黒木欽堂逝き、萩野和菴逝き、友人の凋落相踵ぐ……」という。天囚の死は大正十三年であるから、欽堂黒木安雄の死はその少し前ということになる。かれは讃岐の人。片山冲堂に学び、二松学舎をへて「古典講習科」に入学、二十一年卒。在学中「日本文学志」を考究しこれを上梓しようとし、二十二年島田重礼の序もえたが故あつて中止。二十四年九月『本邦文学之由来』と改題して進歩館から刊行。文学とはいふものの内容はわが国の儒学史である。日本漢学史の草分けの一人である。のち東大講師をつとめ、国学院や二松学舎で教授。漢詩文ならびに書画をよくし、書道の普及に功があつた。長尾兩山と親しかつた。大正十二年歿。

礼卿萩野由之は佐渡の人。東大教授。漢学よりは国学、史学の分野での活躍で著名。学士院会員。「古典講習科」

は中退であるが、先述した天囚の「師友壽讌記」をみると、同窓の幹事役でもあったらしく、この時出席者を代表して挨拶を行っている。大正十三年歿。六十五才。

岡田正之は元治元年富山に生まれる。父は昌平黌に学んだ漢学者であった。小水井小舟、重野成齋に学んだのち「古典講習科」前期へ。卒業後幼年学校教授をへて東大教授。日本漢文学に精しい。「顧ふに、品性の修養と共に、趣味の領會が人格を作る上に於て必要とすれば、我が国民は少くとも我等の祖先が味い得たる漢文学とその瀝ぎ出せる作品とに向つて先ず研究の指を染めざるべからず……我が国民の精髓の發したる所は独り和歌と和文とのみにあらざるなり」とは、岡田の『近江奈良朝の漢文学』の「序説」の一部である。またこの書はかれの学位請求論文であり、名著として名高い。昭和二年歿。六十四才。

児島献吉郎、山田準、島田鈞一らは後期の卒業生である。児島献吉郎は慶応二年、岡山に生まれる。父は漢学者であった。上京後三島中洲に学び、「古典講習科」卒業後は熊本の高教授、この時湯浅廉孫を教える。のち京城大学教授。『支那文学考』『支那諸子百家考』等の著がある。昭和六年歿。七十才であった。山田準は慶応三年、岡山の在所に生まれる。本姓は木村。三島中洲に認められ、山田方谷の後をつぐ。高教授・七高教授ののち二松学舎学長。陽明学の泰斗として知られ、また詩文をよくした。『陽明学講話』『伝習録講本』等の著がある。昭和二十七年、八十才で歿。島田均一は、慶応二年、箕村島田重礼の長男として生まれる。はじめ藤沢南岳につく。「古典講習科」を了えると、明治二十七年一高教授、のち昭和三年東京文理科大学教授。『春秋左氏伝新講』等の著がある。昭和十二年歿。七十二才。

なお経歴は未詳だが、明治三十年刊の『漢文講義全書』に、前期卒の花輪時之輔が『論語』『孟子』『日本外史』、名取弘三と堀捨次郎が『文章規範』、深井鑑一郎が『孝經』を書いている。卒業後も連絡をとりあつて専門の分野でそれぞれ活躍していたようである。

(五)

酒は飲まず、烟草は吸はず、碁も打たず、将棋もささず、書畫骨董も好む所なく、学校の講席に臨む外は、終日端坐して机に対し、書を読み筆を執りて餘念なかりしは、亡友林浩卿博士の日々の生活なり。

右は林泰輔の『支那上代史之研究』の冒頭に掲げる滝川龜太郎の序の一節である。林泰輔は、安政元年千葉の香取に生まれ、並木栗水の門下に学び、二十年「古典講習科」前期を卒業。一高・山口高校の教授をへて、東京高師教授。『周公と其時代』『亀甲獸骨文学』等の大著がある。昭和十一年歿、八十二才。

滝川は先きの文章に続けてこう追憶する。

博士が大学漢学科に入りしは明治十六年九月なり。余も亦幸にその後之列り、共に一橋寄宿舎第八号室に書籍机案と頓住せり。年齒余より長ずること八九歳、その教室に出でて書を講ずるを聞くに、音吐朗朗解釈明晰、遙に等儕に超越し、既に大家の規模を具せり。如何なる多忙多事の時と雖学課の予習を怠らず。試験前復習の時に至れば教科書を取りて卷初より卷末に至るまで悉く之を読み、一字一句も省略せず、尚ほ時日あれば再三之れを反復すること初の如し。その己の爲にして人の爲にせず、学問の爲にして試験の爲にせざる忠誠篤実の讀書法は博士の博士たる所以にして、今の所謂試験勉強を爲し、一時を糊塗して及第をのみ目的とする子弟の鑑戒と爲すべきなり。

およそ几帳面でまじめ一点張りの博士の日常を紹介したあと瀧川は、この勤勉篤実な博士の学問的成果を集約して次のように評価する。第一は朝鮮史の研究。本邦の率先たる者である。第二はわが国の漢学者たちの秀れた経解の蒐集。中井履軒や亀井昭陽等の未刊稿本の蒐集である。第三は諸子考。經史とともに重視すべしとの主張。第四は唐虞三代文献考の著作。甲骨金石文の集成的研究で、『周公と其時代』はその成果の一部であった、と。以上瀧川の林評、至当公平の見といつてよい。今日林泰輔の名は甲骨文研究でのみ記憶されるが、たとえば瀧川の指摘する第二の日本

経解の蒐集、あるいはそれへの著目など時代に先んじた眼識であつたこと、忘れてはなるまい。

林泰輔・西村天囚・安井小太郎らと親交のあつた瀧川亀太郎、号君山は、慶応元年に松江に生まれ、藩儒内村鱸香に師事、ついで上京して島田篁村の塾に入り、やがて「古典講習科」に入学。前期卒。その後長く仙台二高の教授を勤め、傍ら講師として東北大学へ出講。昭和二十一年、松江の自宅で歿する。八十二才。主著は『史記会注考證』百三十卷。昭和五十年、瀧川君山の顕彰碑が旧居の一角に建てられた。吉川幸次郎の「碑文」は、その一節で『会注考證』に説き及んでこう述べる。

先生乃ち二十年の功歴を以て衆説を驗し、旧本を網羅す。百川の海に吸われ、群峰の岱に小なるが如し。千年の疑滯發揮して殆んど盡す。宜なるかな、東京始めて之を刻するの後、海外通に伝印の本有り。衣被の広きこと、我が邦儒者の業、其の匹を見ること罕なり……⁽¹³⁾

長尾甲、通称慎太郎、号は兩山。広く『中国書畫話』の書で知られる。中国の芸術一般に深く通じていた。元治元年、四国高松の生まれ。幼時から父に従つて漢学を修める。明治二十一年「古典講習科」後期卒。五高・東京高師の教授を勤めたのち、明治末から大正初期にかけて上海に移住。商務印書館顧問となる。帰国後は、書・詩文の会主宰。昭和十七年の歿、七十九才。『中国書畫話』の解題で、吉川幸次郎はかつて狩野直喜から聞いたこととして長尾の逸事を伝えている。

明治の初年、東京で白面の書生であつたころの長尾氏が、清国公使館を訪問したときの逸話を、私はかつて狩野氏から聞いた。大清帝国の公使黎庶昌は、長尾氏が、ひとえの着物をきているのをいぶかり、寒くはないかと、筆談で問うた。長尾氏は即座に筆を走らせ、昂然と答えた。「寒士ハ寒ニ慣ル、ナンソ衣ノ单ナルヲ怕レンヤ」、寒士慣寒、那怕衣單。突差の応答が、寒・单と、韻をふんでいるので、公使は驚倒した、と。

この逸話「明治の初年」といえば黎公使第一回目の来日時明治十五六年のことであるらしく、もしそうであれば

雨山は二十才を少し過ぎたばかりであった。

「古典講習科」甲部、すなわち国書科の出身ではあるが、明治漢学界に重きをなしたものに安井小太郎、号朴堂がいる。かれは幕末の大儒安井息軒の外孫で、安政五年の生まれ。十九才で島田篁村の門に入り、のち京都の草場船山に学び、十五年「古典講習科」甲部に入学。卒業後は学習院の助教・教授、北京大学堂教授をへて一高教授。大正十四年の退官の際、自らの記念論文集のかわりに息軒の日記『北潜日抄』を刊行する。戊辰の江戸崩落の日々の記録である。ついで大東文化大学等で教授。『日本儒学史』『曳尾集』等がある。昭和十三年歿、八十才。

(六)

明治維新以来の漢学の趨勢を回顧して見るに、安井息軒・鷺津教堂・岡松甕谷・根本通明・中村敬宇・島田篁村・竹添井井等次第に凋落して其命脈も漸く絶えやうとする時に方って、其間を彌縫して起つて来た者は、主として大学の古典科出身者であった。

右の一文は、林泰輔『支那上代之研究』の冒頭に附された井上哲次郎の序の一節である。井上の評するとおり、日本漢学の命脈をつないだものは、まさに「古典講習科」出身の学者たちであった。たとえば市村瓊次郎・林泰輔・岡田正之・瀧川亀太郎・児島献吉郎・島田鈞一等等、中退や傍系からの西村時彦・安井小太郎・萩野由之らの名も挙げられる。錚々たる学者群である。

思えば明治十年前後、息軒をはじめとする幕末宿儒の相つぐ死に加藤弘之らが伝統教学の危機を察して、「古典講習科」を設置したねらいは見事に的中したといつてよい。井上哲次郎の評も正しい。

それではこの時期、こうした人材がなぜ「古典講習科」にこぞって入学したのであろうか。答えは容易である。理由はかれらがひとしく篁村や成齋・小舟といった漢学塾の出身であつて、いわゆる外国語を習得していないというこ

とである。明治十六年まで東京大学での講義は、英語で行なわれていた。漢学塾育ちのかれらは、いかに才能があるうとも語学面で東大への進学は難しかった。かれらよりほんの一時期遅い慶応三年生まれの服部宇之吉の場合、明治九年に東京で小学校を了えると、漢学・数学・英語を塾で学び、十四年には大学予備門の予備校に入学、十六年に大学予備門に入り、二十年、第一高等中学と改称されたその年の第一回卒業で、九月に帝国大学文科大学に入学。服部は運良く学制が整備されるのに具合よく乗っていった感がある。これに対して十六年に「予備門」即ち旧制一高が開設されたとき、「古典講習科」の受験者の多くは、年令的にも服部よりは数才年長で、すでに漢学塾でひと通りの学問は身につけていた。まして当時東京や大阪の大都会でこそ数学塾や英語塾が存在したが、地方にそれを望むことは難しかった。語学を身につけるべきチャンスもまたなかった。地方にはこうした秀才がごろごろいたのである。

種子島出身の西村天囚にせよ松江から上京した瀧川亀太郎にせよ事情は同じであった。また菅沼貞風の場合、「古典講習科」で漢学を学ぶことが本来の目的であるよりは、ともかくここに入学して身分を確保し、図書館に通い本来の経済史研究に力を注ぎたいとの思いがあった。要するに「古典講習科」は「語学」抜きで入れる大学への唯一の門であったのである。ここに秀才たちが雲集したのも当然のことであった。

それではこの「古典講習科」諸子の総体としての功績とはどのようなものであったのであろうか。むろん天囚のいう「前を継ぎ後を啓く」事業は果たしていたが、それは具体的にはいかなる行動であったのであろうか。

第一にかれらが「古典講習科」に学んだものは、従来の「左国史漢」と漢詩の習作といった漢学から離れた、新来の『皇清經解』を中心とした純粋に学究的な実証的学問であった。また「聖諭記」が期待する相材の育成を志すものでもなかった。学問はここで政治や道徳とひとまず別離して、学問そのものの道を歩み出していた。いわば近代的な「漢学」研究がここから開始されたということである。

第二にかれらが漢学の研究領域を拡大しつつ、新しい学問をも見出していったことが挙げられる。たとえば東洋史

の全般的展望に業績を残した市村瓊次郎、古代史・甲骨文研究の林泰輔、中国芸術論の長尾雨山等いずれも新分野を開拓するものであった。そして新たに生み出された学問の一つに「日本漢学史」研究がある。西洋に文学史があつて、文学の發達を跡づけ、これを研究する順序もよく整っているのに対して、わが国にはこれがないのを遺憾として心を日本の文学史に潜めて研究したものが、「古典講習科」後期の欽堂黒木安雄であつた。文学とはいふものの内容は日本儒学史である。かれの『本邦文学之由来』の出版が明治二十四年。二十七年には安井小太郎が『本邦儒学史』を發表する。またこれより以前「古典講習科」の教授であつた島田重礼が日本漢学史のごく大まかなアウトラインを「与黎純齋書」で書いている。こうみてくると西洋の學術研究に觸発されてわが国の漢学の史的研究も起つてくるわけであるが、そのはじめは「古典講習科」の人々によつて着手されたといつてよい。

東京大学の創設が明治十年。このとき文学部の第二科として和漢文学科が設置された。今日の中国哲学科の前身である。しかし明治十九年、帝國大学と改称するまでの十年間に、專攻の卒業生はわずかに二名であつた。その後も二十七年に卒業生三名といつた具合に、東大の漢学專攻者はまことに微々たるものであつた。当時の俊秀たちの目は一途にヨーロッパを向いていた。漢学世界は旧くさく若者の心を捉えることはなかつた。しかし社会の底流には根強く伝統教学である漢学は生きていた。また事実として江戸以来の秀れた漢学研究の実績も存していた。当然漢学は、時代に應じて姿を変えつつ、かつ優良な伝統を評価し継承せられねばならない。この任務は果たされねばならない。結局この分野においても、切角新しい漢学教育を身に体した「古典講習科」諸子の外には、この責務を全うすべきものは見当たらなかつた。この時期、四十数名の「漢学」專攻の卒業生は決して少なしとしない。かれらが漢学界の要所で活躍するとき、その総体としての活動こそまさに「前を継ぎ後を啓い」て眞の近代中国研究への基盤を形成し提供することとなる。大いなる力であつた。第三に評価すべきことがこれである。

また、かれら「古典講習科」の諸子は、いずれも幼少年時代から家庭や塾においてきびしい学習を施されていたために、漢詩・漢文に習熟している、自由に漢文を操作し表現しうるわが国最後の団塊世代であった。天囚・君山・雨山、いずれも然りであった。

注

- (1) (一) 内は筆者補、以下同じ。
- (2) 重野成齋遺稿卷十五
- (3) 中村正直「古典講習科乙部開業演説」明治十六年四月十六日。
- (4) 東京大学百年史五〇三頁。
- (5) 注(3)に同じ。
- (6) 必ずしもこの規則は守られていない。たとえば西村天囚は数えて十九才、名取弘三は四十を過ぎていた。
- (7) 実際の合格者は、官費生二十二名、自費生十八名の四十人であった。
- (8) 『東洋学の創始者たち』の『狩野直喜』章一七六頁。昭和五十一年講談社刊。
- (9) 菅沼貞風『大日本商業史』の冒頭に掲げられている。
- (10) 『蘭城遺稿序』の一文は、神田喜一郎編『明治漢詩文集』三一〇頁に収載されている。
- (11) 『東方学』五十三輯所収の「先学を語る―市村瓚次郎博士」の畧歴による。
- (12) 『東方学』五十三輯所収の「先学を語る―市村瓚次郎博士」に経歴は精しい。
- (13) 原文の訓読は、島根大学教養学部漢文学研究室の釈文によった。

〔補注〕松平良郎については、「斯文」十編一号(昭和三年)に漢文による「七十自述」の一文が掲載されている。それによると安政五年江戸に生まれ、並木栗水、川田壘江に学んでのち「漢学課」に入学。神宮皇学館教授たること前後四十年、自ら「専講漢文、然徒呻估畢而已、非有所發明」という。文中「小川則要、字士期、号廣湍、陸前の人」と「漢学課」で同期であったとあるが、この名は卒業者にはない。恐らく中退したものであろう。